

町の飲み屋で飲んでいるとむこうの席で老年の皮膚科医が話しているのが聞こえる。「まさかと思つたがやっぱりおかし。湯と水と針と筆で調べてみると知覚が失われている。岡山の長島愛生園に連絡して医務官がやってきて、らい、まちがいありません。いやあ、久しぶりに興奮したなあ」。

十年前に初めてらい療養所、長島愛生園を訪れ、そこで暮らす人を知った。肉体の変形があり、強いられた別離があり、政策としての隔離があった。らい回復者の社会復帰を、拒絶のない新しい故郷を、とスローガンを口にするにはやさしかったが、時が経ちこちら側の事情のもとに何も口にせず、ひたすら五年の月日を重ねることもまたやさしいことだった。そして町の飲み屋で久しぶりにらいのことを耳にしたというわけだ。それもらい療養所の側に立ってらい回復者を社会へ送ろうと口にしてたところとベクトルを反対にした、新しく発病したら患者を島へ送るといふ話であり、改めて今暮らしている自分の側を確認させられた。あれから五年、今ぼくは肉体の変形も別離も隔離もない生まれ故郷の町内会の、子供三人をかかえたまぎれもない一世帯主なのだ。飲み屋での話以来、一度愛生園へ行くとうと決めた。

同時代観

人は私を称して「拾い魔」という。最近拾うのは専らマンガである。といつても悲しいかなマンガ世代に属さない私は、拾っても読むわけではない。一緒に働く若い同僚にあげるのが楽しいのだ。でも本当の楽しみは拾う時のスリルにある。駅のゴミ箱をのぞいて新聞の陰から表紙がみえるとゾクッとして、さっと拾いあげる。大勢人がいると一寸気がひるむことがある。そうするともう駄目だ。要は呼吸の問題である。ゴミ箱の中をさぐるまではしない。まっさら同様の『少年サンデー』や『少年チャンピオン』等二冊も収獲した日は、御機嫌で意気揚々と事務所入りする。

私の拾い趣味は、元を辿ると数年前の米国での生活に始まる。私の愛する北アルプスの穂高にちなんでつけられた「ホダカ」という名の共同体での生活である。「ホダカ」はワイラデルフィア西部の一角を中心に、十数軒、約百人位のメンバーを擁する(一九七三～七五年当時)ライフセンターという都市コミュニティの一軒である。このコミュニティは非暴力社会変革を目指すグループで、「新しい社会のための運動—MNS」という全国的ネットワークをもつ運動の生活母体でもある。七〇年代の初めクエーカー教徒を中心として生まれたもので、思考、人間関係をも含めた社会の暴力を否定し、社

今年の五月に、五年ぶりに島をたずねた。島にはモダンな都市の大学を思わせる大時計のついた看護学校が建っていたし、水害のあとの新しい造成地には団地が並んでいたし、住宅には新しいサッシが入れ替えられていたし、そこは外見療養所ではなくふつうに見る町だった。昭和三十九年に詩誌『らい』を創刊し現在までに二十四号を発行しているらい詩人集団のメンバーの何人かに会った。五年の間にぼくはらいのかかえる問題のずっと遠くへと変わったし、島の風景も変わったのをみてしきりに「変わりましたねえ」と連発するのだが、返事はない。Mさんは「変わったといえ、三十年間陽性だったライ菌が今年初めて陰性になって何だか変な気になったことかな。子供がいない、それが変われない理由じゃないかな。体をこわして病棟へ入院してめでたく退院となっても外の社会の退院のようにうれしくもなんともないもんな。待つ人があるわけでもなし。さびしいもんな。だから毎日これ、一升の酒飲んで」。Mさんは入所以来変わることもない凍結したさびしさの中に今もいた。詩誌『らい』がここ三年間発行されなかった事情を、表現の動機である悲惨や怒りがうすらぐ何かがあつてのことではないかと推測した自分のなかのらいの軽さを思い、少し冷汁がでた。Sさんは内海のシャコやタイを用意して食べさせてくれたが、ぼくはこの人からいんなことを教えられている。日本のらい患者発生はずかになり、隔離政策のもと日本のらいは遠くない将来に終わるといわれている。Sさんはそのことに対して「私たちのぞみは、消滅でなく解決である」(『らい』三十号)という。そして解決につながるら者・非らい者の試みに参加し詩誌に記録し続けている。らい者は

会の諸制度の変革を求める傍ら、自己変革をも期する宗教的・精神的色彩の強いものであった。物質的に豊かで安定した生活を営む米国の大多数を占める白人中産階級の中で、ベトナム戦争を始めとする自国の帝国主義的あり方、人種差別等、周囲に渦まく問題に対し、不満と疑問をもつ特に知的階級にとって、ライフセンター・MNSは、未来に一条の光を投げかける魅力的なものと映ったらしい。月一回のライフセンター紹介のオリエンテーションや非暴力直接行動のワークショップには、全国各地から参加者が集まり、ライフセンターに住みたい希望者は後を断たなかった。そうした中にひょっこりまぎれこんでしまった私は、弱虫が故に暴力をふるった覚えはなく、敢えて暴力を肯定する訳でもないが、かといって非暴力の「信者」にもなりきれない異端者であった。またライフセンターのもつ白人中産階級の発想に抵抗を感じ、それこそ非暴力抵抗で、そこでの活動そのものはボイコットし、市内にある中華街を中心に運動をしていたアジア系米国の組織、黄粒会(イヤロー・シーズ)に加盟、彼らの運動を通して私は、初めて『共産党宣言』や毛沢東の『矛盾論』を読み、政治活動の洗礼をうけた。

私はここで自分のつたない政治活動歴を語るつもりはない。本題の「拾い魔」の発祥の地「ホダカ」の生活を紹介したい。「ホダカ」は三階建ての古いが、台所、食堂、居間、浴場等共通の部屋の他六人の個室からなる大きな家である。この家は、当時六十歳のジムと五十三歳のルイスという夫婦が、ジムの停年退職を機に新しい人生を志して、それ迄ニューヨークの郊外で住んでいた家を売り払い、その金で買い、新しい共同体を作るべく開放したもので

月刊 年刊誌 No.10766
1979年7月

村を追われ社会的な死を強いられる。それに対して新しい村を、新しい故郷をつくらうとほくが言ふとSさんは「らしい者にとって故郷は自己回復希求の象徴としてあるのであって地理的に別の地点に替りたものを作れるというものじゃない」「らしい」(十九号)という。「拒まれることに馴れたトータルに／＼いらだちは部分だ(略)詩(春よ来い)より」(らしい)十九号」と解決という春を待ちながら、身に刻まれたらしいの深さを通して春の遠いことを教える。

らしい者が偽名を使い出生地を隠してきたことに触れて「個の伸長をもとめひろげようとする近代化に対し、らしい者がとった形は自己否定、ひつような無名化の方向だった。無名化への意志の強さは、すべての個の肯定の願いの強さでもあったのです」(『愛生』昭和四十四年一月号要約)。また、三年ぶりに発行された二十四号に聞き書きとして「ノン(らしいでないらしい)」を載せている。実際はらしいでなかったのだが一度病氣としてのらしいを疑われたばかりに社会が一人の完全ならい者をつくってしまうという話で、日本のらしいをつくったのはらい菌というよりむしろ社会のあらゆる拒絶だという本質的な指摘だ。ほくが「どうしてらしいでないという証明までもらしいながらこの人はらい菌に戻ったのか」とたずねるとSさんは「あれには書いてないが、あの人は村人から家を焼かれ、妹さんはそのため自殺し、相当ひどい目にあっています。戻るしかなかった。あの人の他にもらいでないらしいの人は何人もいますよ」。らい療養所は今も悲惨な話で話っていて、今まで一度もそれが消えたことがない。Tさん「変わるわけじゃない」。久しぶりに夜中の一時まで酒を飲み話を聞いた。変化を確かめに行つたのに変わらない部分がいかに大

きいかを改めて教えられてしまった。

時の経過は必ずしも進歩ではない。非らしい者がらしいを忘れ、らしい者がうたうことが少なくなつたとするならば、らしいについて後退の時かも知れない。今は宣言の少ない時代だ。らしい詩人集団の十五年前の宣言は今も訴える力を持つ。もう一度読みなおしたい。

宣言

- 一、私たちは詩によって自己のらしい体験を追及し、また詩をつうじて他者のらしい体験を自己の課題とする人々を結集する。
- 一、私たちは、私たちの詩がらいつの対決において不充足であり、無力でもあったことをみとめる。なぜそうであったかの根を洗いざらし、自己につながらる病根を摘発することから、私たちは出発するだろう。
- 一、私たちは対決するものの根づよさをようやく知りはじめたところである。それは日本の社会と歴史が背負いつづけた課題とひとしいものである。だから私たちはらしいに固執するだろう。なぜなら私たちはらしいの苦痛をはなれて対決の足場は組めないから。
- 一、私たちの生の本質と全体性としてのらしい、との対決への志向が、集団の最低限の拘束である。一九六四年八月、らしい詩人集団

存続する運動体にとって、いつも出発点だけが確かなのだという。町内会の一世帯主として、この宣言に答えるものを用意したいと思う。

ある。偶々同時にライフセンター入りをした私が、彼らと一緒に初めからの住人となり、住心地のよさと経済的であることから、ライフセンターから脱退した後も住み続け、結局二年間暮らしたことになる。他の三人は入れ替りがあり一定しなかったが、男女のバランスを考え、男三人、女三人という構成は変わらなかった。

新しい社会を目指すライフセンターは、核家族制に代わる社会関係を追求しており、「ホダカ」もそれに習いジムとルースは夫婦であったも、「ホダカ」に関する限りそれぞれハウスメンバーと見なされる。更に家事における男女の差別はなく、平等に分担する。だから食事当番は六日に一度、二人一組の血洗いは三日に一度まわってくる。その他共通の部屋の掃除、買物も同様である。それ迄料理は下手で嫌い決めていた私もそれでは済まされず、包丁を握る破目となった。ところがそれが結構楽しいし、腕も満更ではないということになった。それは女の義務、よい主婦の条件としての料理への抵抗から解放されたからだろうと納得した。もう一つのこの生活の特長は、豊かな資本主義社会の持てるアメリカ中産階級が物質文化への幻滅感と反省から主張し、実践を試みた質素な生活である。セントラルヒーティングといつもお湯の出る生活、大きな完全自動の洗濯機にドライヤー、広い台所には、やはり大きなオーブン、冷蔵庫、そして何よりも一人最小十畳位の部屋のある生活は、今の日本の基準でも質素とはいいいないが、こうした共同生活そのものが質素な生活と呼ばれる程米国の中流以上は豊かなのだらう。食費は一人一日約一ドル、家の維持費が週に十二ドルで、私たちは一月百ドル足らずで暮らしていた。その安さの秘訣は、食料の共同購入、パ

ン、ヨーグルト等手造り、菜食で肉類を使わないことにある。またこれも消費文化の最たる米国でこそありうることだが(日本にも若干その兆しが表われているが)家具や台所道具の多くは道に捨ててあるのを拾ってきたものである。週一回ゴミの収集日の朝、街を一まわりすると古くてもちゃんと機能する家具が一式揃ってしまう。これが私の物拾いを病みつきにした。

この質素な生活論には、ある水準の生活を保つために強いられる中産階級のサラリーマン的職業からの解放も含まれる。収入は最低限でいいから職業に束縛される時間を、活動に解放しようとするものである。だから皆ペンキ塗りとか、パートのタイピストとかアルバイトの仕事をしている自発的半失業者である。

こうした新しい価値観を実践する試みは、米国ではヒッピーを始めたとして様々な形で可成り幅広く行なわれていると思うし、確かに社会を変えていく一つの力になっていることは否めない。しかし殆どの場合それは中産階級、特に白人の運動であり、低所得階級——その主流をなす黒人も巻きこむものとはなっていない。

そうした運動の一つライフセンターの在り方に関して批判をいい続けたものの、帰国して四年経つた現在、結構「ホダカ」で経験したことを相変わらずやっている自分を発見する。半失業の自由を楽しんでいるし、人から貰った古着を着ることは一向に苦にならない。「女らしくない」ことにひげ目も感じない。社会の枠からはずれる楽しみ——資本主義社会に対する消極的抵抗——を「ホダカ」の生活は教えてくれたのだと思う。マンガを拾うのも、そうしたささやかな楽しみの一つである。

同時代観